

池田理代子さんが語る 教師 東敦子さん 晩年の横顔

池田理代子さんは、昭和二十二年の大阪生まれ、東京都立白鷗高校から東京教育大学文学部哲学科(現筑波大学)を中退。

団塊のトップランナーとして、大学在学中、学資稼ぎにお好きな劇画を描きはじめてのが、後に一世を風靡した「ベルサイユのばら」でありました。その後「女帝エカテリーナ」「栄光のナポレオン」「聖徳太子」など歴史に題材を得た作品は、ヨーロッパ・アジアでも翻訳されて広く読まれ、多くのファンを持つておられます。

紺綬褒章、東京都知事褒章、二〇〇九年三月フランス大統領からレジオン・ドヌール勲章シュバリエ章、受章。日本ペンクラブ会員、日中文化交流協会会員。

池田さんが、四十七歳から一念発起して、音大音楽科進学を志されたのは有名ですが、その時の恩師がわが二十回生の東敦子さんでした。高齢の新入生で、最後の教え子になられた池田さんと、病魔の身を素知らぬ顔で、厳しく向かい合う東さんとの教師と生徒の葛藤ぶりは心打つものがあります。

以下にお二人の師弟愛をお伝えしながら、晩年の東敦子さんを偲んでいただきたいと思えます

池田理代子さん著作「あきらめない人生」(海竜社刊)から転載のご快諾を、ご本人から直接いただいて掲載させていただきます。ご厚志に心から感謝と御礼を申しあげます。(編集部 柿崎眞吾)

よく生きることと、

よく死ぬことは表裏一体

池田 理代子

常に凜と生きていた恩師・東敦子先生

一九九九年のクリスマス・イブ、四谷にある聖イグナチオ教会でのミサにあずかって帰宅した私は、その夜が更けてもなぜか息苦しくなかなか寝つくことができなかった。

明け方によく浅い眠りについた私は、程なくして夫に叩き起こされる。

「大変だよ、東先生がなくなられた！」

前夜のミサで、恩師・東敦子先生の一日も早い快癒を祈ってきたばかりであった。しかしベッドから飛び起きながら、同時に「ああ、やはり・・・」という妙に納得のいくような思いに、心のどこかが森閑としているのを感じていた。

十二月二十五日午前一時七分、敬虔なカトリック教徒でいらつしやった東先生は、ご主人とお嬢さんの二人のクリスマス・賛美歌に微かにうなずかれながら、その一時間後に息を引き取られたという。

東敦子先生と初めてお目にかかったのは、私が四十五歳で音楽大学の声楽科受験を決意してから程な

くのことであった。

すでに日本が世界に誇るプリマドンナとして、世界中の名だたるオペラハウスで二十年以上にわたって活躍され、数年前からオペラの舞台から引退を決められて、後進の指導をもっぱらになさっていた時期である。私が『ベルサイユのばら』を描いた一九七二年には、かの三浦環でさえ立つことの叶わなかったニューヨーク・メトロポリタン歌劇場に、日本人として初めて出演され、名実ともに世界的プリマドンナとして知られていらした東先生は、まさにはるか雲の上の存在で、そのような方から直に声楽の指導をしていただくのだと思うだけで、足の震えが止まらないほどであった。

私が目指していた音楽大学は私立でも最難関であり、自身の年齢のこともあって、初めから一浪を決め込んで二年がかりで受験勉強に取り組んでいた。それでも、入試が近づき思わず気弱になって「ピリでもいから合格したい」と口走った私に、東先生はきりりと表情を改められ、「世間の心ない人達は必ず、あなたが有名人だから合格できた、と言いますよ。誰からもそんなことを言わせない立派な成績で合格なさい」と仰った。

合格発表の日、電話で、「おめでとう。文句のつけようのない立派な成績でしたよ」と祝福してくださった言葉に、溢れる涙を止めることができなかつた。

スを歩いていらつしやるるときも、常に凜として誇りに満ちた美しい姿勢を崩されることはなかったが、その姿勢はまた同時に、先生の生きていらつしやる姿勢そのものであった。曲がったことや不正を憎まれ、そのくせ、誰よりも人を信じやすい純粋な魂を持ち続けておられ、努力することをなによりも尊ばれた東先生の姿は、「二十歳そこそこの年若い学生たちをも、「人間の出来の違う方」と感服せしめるほどであった。

「私の声は神様から授かったもの」

私が入学した年から既に癌との闘いを始めておられたのだが、門下生の誰もそうとは気付かなかつた。四年生になったとき、乳癌から転移した骨髄に犯されておられることを教えられ、ショックで取り乱した手紙を書いた私に、「思い残すことのない生き方をしてきた」とファックスをくださった。

忍び寄る病魔と闘いながらも、歌手であることを第一義とされ、「私の声は神から授かったもの。声帯に悪い結果をもたらすような治療を受ける訳にはいきません」と、ホルモン療法などをきっぱりと拒否されたと同っている。

治療の間には大学に顔を出されて学生の指導を続けられ、それがお出来にならないときには自宅に

た。

かくして四十七歳で念願の音大生になることができた私は、それからの四年間、東先生から本当に歌も含め多くのことを教えていただいた。発声や歌の表現はもちろんのこと、舞台での立ち居振る舞いや髪型、衣装に至るまで、実際に世界の舞台で活躍していらした経験に即しての貴重な指導をこと細かく頂いたが、とりわけ、「西洋の音楽を学ぶ者は、背景になる歴史など、西洋文化をしつかり教養として身につけねば」と繰り返し強調された。十分に行き届いた指導をしたいから、との理由で、先生は原則的に一学年二、三名しか門下生をとられなかったが、クラスメイトたちよりふた周り以上も年上の学生である私に対しても、レッスンでは皆と同じように厳しく真剣に接してくださった。

ただ私に敬語でお話をされるのには戸惑わされた。何といっても東先生は歌い手として、私たちが足元にも及ばないような偉業を成し遂げられていらつしやるし、実年齢でも、人生の大先輩なのだ。「先生、私に敬語はやめてください」と申し上げると、「あら、どうして。わたくしは池田さんが作家として成し遂げられたお仕事に感服しているのよ」と笑っておられたが、クラスメイトや先輩たちの前では気恥ずかしいことの上もなかった。

レッスン室やホールの中ばかりでなく、キャンパ

学生たちを呼んでレッスンをしてくださった。残された命を傾け尽くすような渾身のレッスンに、卒業試験間近であった私たちクラスメイトは、思うように歌えないわが身の情けなさに焦れるような思いをしながらも、一回一回、自分を燃焼させながら勉強したものだ。誰もが「いま東先生から教えていただいていることを、決して忘れないように身に刻み込んでおこう」と言葉にならない決心をしているのが分かるほどの気迫であった。

プリマドンナとして、病魔に冒されたやつれた姿を他人に見せたくない、との誇りからか、入院後は家族以外の面会は一切拒否された。

薄れ行く意識の中で、「神様から頂いた喉だけは無傷のままお返しできました」と洩らされたことを伺ったとき、この人生を生きているのはどういいう意味があるのかが卒然として理解できたような気がした。

この素晴らしい師に出会った六年、私は奇しくも東門下の最後の卒業生として世の中に出ていくことになった。素晴らしい出会いがいつも素晴らしい別れにつながっていくとは限らない。

けれども、あまりにも早い死であったけれど、よく生きることとよく死ぬことは表裏一体であることを東先生は身をもって教えてくださった。

その鮮やかにして美しい永訣に、残された私たち

は多くのものを胸の内に抱え込んだまま呆然と立ち尽くしているような思いである。

「とうとうこんな歌が歌えるようになったのねえ：」と喜んでくださったプッチーニの歌劇『トスカ』のアリア「歌に生き、恋に生き」、そして「後半をぜひ聴かせていただきたいわ」と褒めてくださったベッリーニの歌劇『清教徒たち』の「ここであなたの優しい声が」：私と同様に、門下生たちのそれぞれが、東先生から最後にレッスンをしていた曲を、これからも一生大切に研鑽を積み歌っていくのに違いない。

舞台上に立つとき、いつも客席の真ん中に東先生がいらつしやって、あの大きな目でじつと見つめながら耳を傾けていてくださるのだと感じ、黙祷しないではいられない。

東先生によってカトリックの信仰に導かれ、洗礼に際して代母になっていただいた私は、偶然にも先生の洗礼名『アンナ・マリア・チェチリア』に共通する『マリア・チェチリア』の名前を授けていただいていた。「洗礼をお受けになるなら、代母になってさしあげたいから、急いで」とおっしゃったとき、東先生は、その一年後に神に召される日のことを漠然と予感していらしたに違いない。

おわり